THE VINES

by MASAKO KARASAWA photography by JEREMY GOLDBERG

**一人の少年がベッドルームで作り上げた、
すべての音楽への愛に満ちた1st『ハイリー・イヴォルヴド』。
この作品と、その少年への世界中からの熱狂的な賛辞は、
リリースから半年経った今も、まだ止むことはない。
すでに「今世紀最初のロックンロール・スター」への道程を、
彼らが歩み出しているのは間違いないだろう。
輝きと興奮に満ち、そして微かな不安を感じさせる、
彼らの現在地を、前号に引き続いてレポートしたい**

94年にカート・コバーンがこの世を去って以来、“ロック・スター”はずっと音楽シーンでは不在のままだった。もし、その王冠を手に入れるであろう候補を挙げるとしたら、エミネムくらいかも知れない。しかし、事実として、90年代半ば以降から、我々は誰もが認めるような“ロック・スター”には出会うことはなかった。

そして、2002年。ザ・ヴァインズのフロントマン、クレイグ・ニコラスは、そのスター・ロードを誰よりも着実に歩いているように見える。このシドニー郊外出身の4ピース・バンドは、今年の春にデビュー・シングル「ファクトリー」をリリースして以来、英国のメディアを中心に熱狂的な支持を獲得している。欧州を巡るツアー・サーキットを繰り返す中、6月に1stアルバム『ハイリー・イヴォルルド』を発表するや、その熱波はすぐにアメリカまで飛び火。ビルボード・チャートでは初登場11位という快挙を成し遂げる。その後もチャートインし続け、15週目の11月第一週現在も80位に位置している。早くも、セールスは50万枚を超えた。老舗の音楽誌『ローリング・ストーン』までもが彼らを表紙に飾り、「ロックンロールの復活!!」と大見出しを打つほど、ザ・ヴァインズを取り巻く状況は白熱してゆく。そう、イギリスとアメリカでのザ・ヴァインズは、本当に凄まじい大ブレイクっぷりなのだ。これほど、海外と日本とで温度差があるバンドはいないだろう。しかし、間違いなく、2002年世界でもっとも成功したニューカマーは、ザ・ヴァインズだ。そう、シドニー郊外の街の、ベッドルームで海外の音楽にばかり耳を傾け、スピーカーから聞こえてくる小さな別世界に住んでいたクレイグ少年の生活は、この十数ヶ月間で、目も眩むようなアメリカン・ドリームさながらの大変化を遂げたのだ。

しかし、そんな輝かしい物語と共に、古典的「ロック・スターの悲劇」という物語も、私達は嫌というほど知っているはずだ。「名声を手にした少年は、それと引き換えにハードなロードワークとドラッグで身体と精神をボロボロにしてゆく」というやつだ。そして、現在の彼らを取り巻く状況は、嫌が応にも、かつてニルヴァーナが歩んだ道程を思い起こさせる。シーンに広がる熱狂的支持と共に、メディアはフロントマンにエキセントリックなキャラクター付けをし、「ロックの救世主!」とブチあげる。新しい作品も作れないまま、バンドはどんどん巨大化してゆく――そんなことが、どうにもニルヴァーナとオーヴァーラップする。例えば、あなたは、最新シングル「アウタザウェイ!」のビデオ・クリップを目にしただろうか? どう見ても彼らのファンとは思えない、ハードコア・パンクな出で立ちのオーディエンスが、ライヴ・ハウスでモッシュしまくり、クレイグが半狂乱で転げ回り、ステージの機材をめちゃくちゃに壊す――という代物。そう、ニルヴァーナの“スメルズ・ライク・ティーン・スピリット”とそっくりなのだ。音楽性のかけ離れたオーディエンスをエキストラとしてかき集め、作り込んだ演出によって、バンドに新たなイメージ付けをしようとしたあのビデオに、カートが酷く落ち込んだのは、有名な話だ。

しかし、そんな状況の中、クレイグ・ニコラスの創作意欲は、今、尋常でなく高まっている。このインタヴューでも、彼は2ndアルバムの構想を、幾度も、本当に楽しそうに語っている。「自分は何にも惑わされない、音楽

僕は外に出て酔っぱらうよりも、部屋で音楽を聴いてることの方がずっと幸せだった。自分で曲を書き始めてからは、もうその興奮に取り憑かれちゃって……それからは、もうドラッグにハマるのも、マクドナルドで僅かな小遣いを稼ぐような毎日もゴメンだと思った。つまり、僕は、自分の頭がおかしくならないようにするために、音楽を作るしかなかったんだ

そのものだけにフォーカスするんだ」と自答するように繰り返している。この取材が行われたのは、8月第一週。アメリカでのブレイクが、最高潮に達した時期のものだ(それについての詳しい状況は、前号を参照して欲しい)。穏やかなムードで始まった、約40分間のこの会話から、ザ・ヴァインズというバンドが歩んでいる道程を、まずは感じ取ってみて欲しい。

——— interview with CRAIG NICHOLLS

●今日はアメリカ・ツアーの最終日ですよね。で、この後、ようやくオーストラリアに戻れるわけだけど、正直ホッとしてるところはあったりしませんか?

「まあね(笑)。でも、色々と楽しかったし、このツアーも無事に終わることが出来たから。僕らにもお客さんにも、怪我ひとつなかったし。サポートしてくれたバンドも、どれもいい雰囲気だったから、すごく満足はしてる」

●実際のところ、ここ十数ヶ月っていうのは、あなたにとって目まぐるしく状況や環境が変化した、狂乱の日々、と呼べるものだったじゃない? その日々変化する状況に身を置くことに、戸惑いなりを感じたりはしなかった?

「それは……うん、やっぱりカオス的な部分は確かにあったよね。でも、それってライヴには付き物っていうか、それこそが魅力だって言えるものだとも思うし。ま、ステージの上に限って言えばね(笑)。これまでの僕だったら考えられないくらいの、色んな人達とも出会ったし……まあ、確かに、周囲の状況は凄いものがあったけど、今はもう、あんまり気にしないようにしてるんだ。リラックスした気分でライヴをこなして、必要であれば静かにする時間とか、飲みに行く時間を取るようにもしてるし。ゆっくりとしたペースで、バランスが取れるようにね」

●OK。例えば『NME』なんかを筆頭に、クレイグ・ニコルスという人物は、こんな風に書かれてるよね。「毎日マクドナルドしか食べず、部屋でニルヴァーナとビートルズばかりを聴いていた、引きこもり少年で」——。

「アハハ。うん、そんな感じだよね(笑)」

●「その少年こそ、新世代のとびきりセクシーなロック・ゴッドである」みたいなさ。勿論、それは100%嘘ってわけじゃないかもしれない。けど、あまりにあなたをそんな風にキャラクタライズしたくて仕方がない、というムードは、周囲に確かにあると思わない?

「もしも僕に、本当に代弁出来るものがあるんだとしたら、それは……“自分”と“自分のバンド”だけだよね。新しいジェネレーション、なんて考えたこともないんだから。そもそも、僕が自分の代弁をしてるのかすら怪しいもんだしさ(笑)。僕は、音楽をやることでも、人と会うことでも、基本的に、『自分達にとっていいことだろう』と思えることしかやってない。でも、それが妙な誇張をされてしまってるっていうのも、君が言う通り、事実だと思う。でも、僕なんてホントただの駆け出しのアーティストに過ぎなくって……関心があるのは、音楽を作ることと、バンドをやってくことだけって人間なんだから(笑)! そんな僕を、音楽以外のポイントから注目してみたって、何も面白くないはずなんだよ(笑)。ま、事実、アルバムを作って時にはジャンク・フードばっかり食べてたけどね。マクドナルドに限らず、もう四六時中。でも、その間、それよりももっとたくさんの音楽を僕は聴いてたんだ。僕が家に引きこもってたっていうのも本当だけど、僕は外に出て酔っぱらうより、部屋で音楽を聴いてることがもっと幸せだったんだ。自分で曲を作り始めてからはもうその興奮に取り憑かれちゃって……うん、それを知った時から、僕はもうドラッグにハマるのも嫌だと思ったし、マクドナルドで僅かな小遣いを稼ぐために毎日を過ごすのもゴメンだって思ったんだ」

●うん。

「つまり、僕は、自分の頭がおかしくならないようにするために、音楽を作るしかなかったんだよ——って、こんな話ばっかりしちゃうから、いろいろと誇張されちゃうんだろうけどね(笑)。アハハ。でも、僕が好きなのは曲を作ることと、レコーディングをすることと、絵を描くこと。それだけ。出来るだけ生産的でいたいんだよね。それってつまり、『今からでも、すぐにレコーディング・スタジオに入って、新曲を作りたい』ってことなんだけど。他人が僕らをどう見ようと、それは結局僕自身にはどうすることも出来ないことだし」

●じゃあ、質問をちょっと変えましょう。前に話を聞かせてもらった時、あなたは「僕にとって外の世界、現実の世界には何の意味もなかった。自分は内側の世界、ザ・ヴァインズに取り掛かりきりだったんだ」と語っていました。「そのフィーリングを感じ続けるために、僕はバンドをやってるんだ」ってね。ただ、今は、ザ・ヴァインズとしてこうやって世界中をツアーして回ることがあなたの日常になってるわけだよね。それはつまり、現実世界とあなた、ザ・ヴァインズの関わり方が、以前とはまた違う意味を持ち始めた、とも言えないかな?

「うーん……音楽を聴くことは、勿論、これまで僕ら全員にとってメインのインスピレーションだったけど、楽器を演奏することも歌うことも僕は好きだし、そういうものがすべて合わさって自分の原動力になるものだからね。何ていうのかな、音楽って、僕が理解出来るホント唯一のものだったんだよ。学校で、教師に就職のことなんかの説明を受けても、僕はさっぱり理解出来なかった。でも、音楽っていうのは、たとえ理解出来なくても、サウンドとイメージを、ただ感じ取れさえすればいいものなんだ。うん、確かに昔と今では僕らを取り巻く環境は大きく変わっていて……今はライヴがメインになってるけど、ライヴだってスピリチュアルで表現力豊かなものになり得る。例えば、このバンドはシングルやEPのために曲を作るんじゃなくて、アルバムを最重要視してる。『ハイリー・イヴォルヴド』に入ってる曲もヴィジョンに基づいて力を尽くした曲ばっかりなんだけど、その次、ライヴで演奏する時には、その曲をどれだけ楽しめるかってことが重要になってくるんだ。勿論、その日のムードによって演奏は変わってくるしね。スローだったり、アグレッシヴだったり。でも、それって『音楽を聴き続ける』っていう根本的な部分は変わってないじゃない? それに僕の頭の中はいつだって曲作りのことで一杯だし、もう次のアルバムのアイディアもほとんど固まってきてるんだ(笑)。だから、うん、流れにまかせてる部分は以前よりもずいぶん増えたかもしれないけど、コントロール不能ってところまでは、まだ至ってないって感じかな」

●昨日、初めてライヴを観せてもらって——。

「どうだった?」

●うん、すごく楽しませてもらいました。あなたが言った通り、同じ曲でもアルバムとはまた全然別の魅力が生まれてきてると思ったし。

「だったら良かった(笑)」

●ただ、それと同時に、あなた達がまだバンドとしてクリアしなきゃならない課題も、まだたくさんあるってことも確認した感じなんだよね。

「うん、僕もそう思う」

●それは、バンドとしてのサウンドの厚みや、それぞれのプレイヤビリティにおいての課題だと思うんだけど。さっき次作の話が出たけれど、そこまでに、まず自分達がクリアべき課題があるとしたら、あなた自身はどんなポイントだと思う?

「バンドをやってく目的っていうのは、結成した当時から変わってないんだ。音楽を聴いた時に感じる、パワフルで神聖なフィーリングのためにやってるんだよ。だから、どんなポイントが大事かっていうんじゃなくて、歌詞、メロディ、アレンジ、ドラムのビート、そのすべてが等しく重要だし、それをどう組み合わせていくかっていうのが問題だと思うんだ」

●うん、それはそうだね。

「だから、僕はステージの上から『俺を見ろ!!』みたいなのをやりたいとは思わないし、ギター・ソロで目立ちたいとも思わないし。音楽そのものと、ソングライティングの課程で生まれる素晴らしい解放感、それがすべてだと思うんだ。だからこそ、ライヴってその一瞬一瞬が大切になってくるし、毎日違ったものになってくる。当然、レコーディングとは違ってサウンドを細かくコントロールすることは出来ないけど、反対にヴォーカルの解釈的な部分ではより自由なものにもなったりするんだ」

●じゃあ、そういったステージの上での体験は、明らかに新曲には反映されていると思いますか?

「ああ、間違いなくね。学んだことは限りなくあるから。僕らはバンドとしてゆっくりではあるけど確実に進歩してる。新曲はかなり貯まってきてるし……出来れば、人気者として有名になるんじゃなくて、いい曲をたくさんやってることで有名なバンドになりたいんだ。同じような曲ばかりでなく、いろんなタイプの曲を柔軟にこなす

「自分達のアルバムを作る」ってことが、本当に大きな夢だった。それが実現した今、次の目標はさらにグンとステップアップすることなんだ。1stの出来には満足してるけど、僕らは休んでなんかいられないんだ。だって、試したいアイディアは、どんどん湧いてきてる。僕の頭の中じゃ、次のアルバムの曲は、もう鳴り響いてるんだからさ(笑)!

バンドとしてね。今のところ僕らは、割と古典的な歌ものをやることで知られるようになってる。コーラスのきれいな曲とかね。そういうのは実は2曲しか入ってないにも関わらず。まだ1stしか出してないから人々の印象が限られてるんだ。2ndはもうちょっと時間をかけて、もっと多くのトラックを使おうと思ってる。実は1stの時も、ヴォーカル、ギター、ピアノ、その他の楽器で幾つもトラックを使ってみたかった。でも、結局アレンジに凝るより曲を生かすレコーディングの仕方を選んだんだ。4トラックのデモの評判が結構良くて、曲が良ければ4トラックでも映える、ってことがわかったからね」

●新作の話が続いてるけど、あなたにとってはもう『ハイリー・イヴォルヴド』の楽曲群は、既に2年、3年以上も昔の、過去のものとして、ある意味消化きってしまった感、というのがなきにしもあらず、なのかな?

「うん、もうそれぐらい前になるよね。あれはスタジオでの作業としては最高だったし、僕らの曲に生命が吹き込まれていくのを見るのはワクワクする経験だった。それまでも自分達だけでレコーディングはしてたけど、やっぱり、いつかはスタジオでちゃんとアルバムを作りたいとは思ってたからね。それだけのものを、僕らはバンドとして持ってるって自信があったんだ。レパートリーは優に30曲は越えてたし、多くの人に聴いてもらう準備は出来てた。だから……あの時ののめり込みは、すごかったんだ。で、本当に上手くいったと思ってるよ。心から僕はレコーディングを楽しんだし、プロデューサーもいい仕事をしてくれたと思う。勿論ハードワークだったけど……うん、自分がちゃんと誇れるものを作り上げたと思ってる。だから、本当に『ハイリー・イヴォルヴド』は大勢の人に聴いてもらいたいんだ。つまり、そう、“音楽とポジティヴィティ”が僕らのすべて、ってことなんだけど(笑)」

●最初のインタヴューをさせてもらった時、私は『ハイリー・イヴォルヴド』を、「クレイグの十数年に渡る音楽との蜜月を刻印した作品だ」って書いたんだけど——。

「アハ! “蜜月”っていうのは、いいね(笑)。でも、2ndアルバムはさらに良くなるんだから! まさに今の僕らを代表することの出来る12曲を選んで、ヴォリューム2って感じの雰囲気になるんじゃないかな。歌が中心っていうのは変わらないけど、プロダクション的にはより高度になるはずだし。今度は、もっとスタジオ作業にも時間をかけられると思うしね。それに、もうちょっとエレクトロニックな感じも加えたいと思ってるんだ。あ、でも……逆にそぎ落とした、アコースティックとヴォーカルだけの曲も入れたいな(笑)。『ハイリー・イヴォルヴド』の時は、『とにかくアルバムを作る!』っていうのが目標だった。僕らは、いつでもアルバム単位で音楽を聴いてきたからね。だから、自分達のアルバムを作ることが、本当に大きな夢だった。それが実現した今、次の目標はさらにグンとステップアップすることなんだよ。1stの出来には満足してるけど、休んではいられないんだ。試してみたいアイディアは、もうどんどん湧いてきてる。だって、もう僕の頭の中では、次のアルバムの曲が鳴ってるんだから(笑)」

●(笑)そういえば、ある雑誌で「2ndでは、ネプチューンズと一緒にやってみたい」なんて発言もありましたね。

「うちのベースがずっとそう言ってるんだ。実は、僕にはそれがどういうことなのか、よくわかってないんだけど(笑)。僕としては、ケミカル・ブラザーズと一緒にやってみたいと思ってるんだ。いかにもザ・ヴァインズの曲って感じのじゃなくて……ギターは使うんだけど、彼らのデジタルなスタイルでね。僕自身、やっとエレクトロニックな世界に興味が出てきたってところなんだ」

●エレクトロニックな作品、ダンス・ミュージックなんかだとどんなものを聴いてるの?

「うーん、そんなに数はないんだけどね。ケミカル・ブラザーズとか、プロディジーとか。ケミカル・ブラザーズが一番好きかな。でも、アウトキャストとかもイマジネーションが豊かで、すごくクリエイティヴな人達だと思う。うん、ダンス・ミュージックは“割と好き”っていう感じかな(笑)。あ、でも、デペッシュ・モードはけっこう聴いてるかも」

●なるほどね。じゃあ、ちょっと1stアルバムの話に戻りましょうか。

「あ、うん。そうだよね、先のことばっかり話すぎちゃった(笑)。ごめん」

●いやいや、聞いてて楽しいから大丈夫。でね、『ハイリー・イヴォルヴド』のアルバムのアートワークは、あなたが描いてるでしょ?

「うん」

●あの絵っていうのは、あなたがイメージする“カントリー・ヤード”や“イン・ザ・ジャングル”の光景だったりするのかな?

「うん! 1stアルバムのイメージは、もう最初から僕の頭の中じゃ決まってたんだ。これっくらいの……縦も横も1.5メートルくらいあるカンバスに、あの絵を一年以上かけて描いたんだよ。ちょっとレイドバックな気分で、音楽を聴きながらね(笑)。そう、あれって“秘密の花園”のイメージで……どこかの片田舎の秋の木陰、って感じなんだ。1stの曲は、どれもシドニーの家で書いたんだけど、そこって本当にたくさんの樹があって、ピースフルな場所なんだよ。ほら、あの絵には植物と夕日しか描かれてないだろ? あと、バンドの名前とね。そういうシンプルな構成が、僕らには合ってると思ったんだ。美しさ、コントロール、夢——僕が好きなのは、そういうものだからね。建物とか車とかがあんまり出てこないのは、僕自身がそういうものとは縁のない環境で育ったからだと思う。メロウな環境の中で、自分の世界だけに没頭して、音楽を聴いて生きてきたからね」

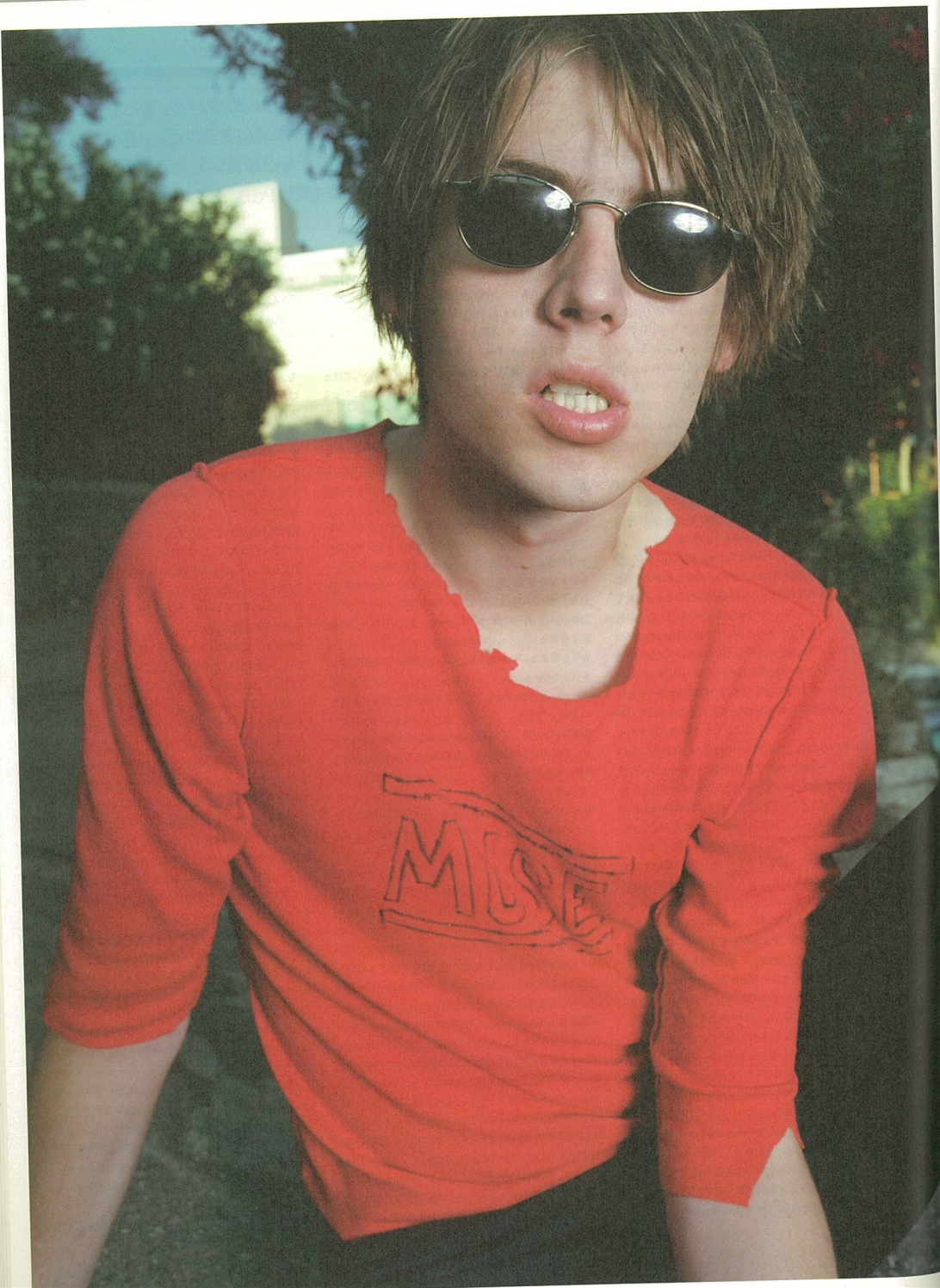
●つまり、あなたにとっては太陽の光や暖かさ、木立の中の空気、緑のある風景の方が、情報が飛び回る社会とかビルの乱立する街よりも、ずっとリアルだし、親しいものだってこと?

「うん、ホントその通り。あの絵は、僕にとってのとてもリアルな現実なんだ。色彩が豊かで、いい香りが漂ってて……そして、出来ることなら僕らの音楽もそうであってほしいと思う。勿論、視覚と聴覚は違うものだけど。でも、自然が持ってる形やパターンって、人工的なものとは比べ物にならないほど印象的だと思うんだ。だから、そう、あの絵が伝えてるメッセージっていうのは……『シリアスになり過ぎるな』、『沈み込むな』ってことなんだよ。確かに十代の頃なんかは、僕だって世界に対して腹を立てて、アグレッシヴになってたことはある。でも、そういう怒りから、音楽をプレイすることで逃げられるようになったんだ。それってつまり、自分は世の中のために何が出来るのか、ってことをやっと理解できるようになったってことなんだよ。僕は音楽からたくさんのものを与えてもらった、じゃあ今度は自分が何かを還す番なんだ、ってね。うん、僕はそれくらい音楽に惚れ込んでた(笑)。だって、他のことじゃ……僕は、そんなことこれっぽっちも考えられなかったもの」

●じゃあ、例えばあなたが音楽で表現しようとしているものと、あなたが描きたいと思っているものとは、同じだと思う? それとも、違う意味を持っていると思う?

「一緒とも言えるだろうし……うん、多分だけど、見えるものと聞えるものって、繋がってるんじゃないかな。だからこそ、いろんな新しいことをやりたいと思うんだけど。最近、ミューズとデペッシュ・モードのDVDを手に入れたんだ。『うん、こういうのもなかなかいいかも』って思ったよ。僕は、子供の頃から絵を描くことも、歌うことも大好きで……『これは間違い、これは正しい』ってことがないからね。感じること、考えること、そして意志がすべてだから。だから、アートっていうのは、他のどんなことよりも、僕に理解が出来るものだったんだ。だって、そこにはそもそも“完全な理解”ってものが存在しないわけだからね。ピュアなエモーションだけを感じ取ればいい。瞑想的だったり、スピリチュアルだったりする、そのパワーをね。考えたりしなくても素晴らしいものはあるし、改めて考えるほどに素晴らしくなってゆくものもある。だから、僕は……いろんな音楽を聴いて、なるべく自由でありたいと思うんだ。音楽やアートっていうのは、幅広いものであるべきだし。でも、今は、いつかビジュアル・アートの方に戻りたいって思ってるんだ。長生き出来るとしたら、いつまでもバンドは続けたくない(笑)。うん、僕の今の夢は、いつか本腰を入れて、自分の絵を描くこと。アプローチ的には、ソングライティングもペインティングもすごく似てるしね」

●いつまでもバンドは続けたくない、っていうのは、『ハイリー・イヴォルヴド』ってタイトルじゃないけど、バンドという、すごくハイ・エナジーな状態を続けてゆくのはキツイし、難しいって感じてるから?

「えっと……僕らはこれからもいいアルバムを作ってゆけ

確かに十代の頃は、僕だって世界に対して腹を立てて、アグレッシヴになってたことはある。でも、そういう怒りから、音楽をプレイすることで逃げられるようになった。それってつまり、自分は世界のために何が出来るのか、やっと理解出来るようになったってことなんだ。僕は音楽からたくさんのものをもらった、じゃあ今度は自分が何かを還す番なんだ、ってね

ると思うし、上達もしてゆけるとは思う。将来的に人気があるかどうかはわからないけどね（笑）。でも、自分達が楽しんで満足するってことが、一番大切なことだから。外側からも内側からも、プレッシャーがかかりすぎないことも必要だし……実際、精神的に参っちゃったことも一時的にはあったけど、それって誰にでも起こることだよね？　だから……うん、スタジオでレコーディング出来たのは本当によかったと思ってる。自信を持って僕らのプロジェクトだって言えるし、自分達ですべてをコントロールしてるし。振り回されてるって感じる事はたまにあるけどね。今はとにかく、スタジオに戻ってレコーディングを再開したくてたまらないんだ。やりたいことはたくさんある。1stだけであと2年も世界中を回る、なんてことはしたくない。だって、それじゃせっかくバンドを、音楽をやってる意味がなくなっちゃうだろ？　自分達の音楽が注目されて、バンドが有名になるっていうのは嬉しいことだけど、僕個人が有名になってしまうのは嫌なんだ。ここまで来れたのだって、自然発生的な進化だったし。何ていうか……アルバムのレコーディング中、ある演奏をしてた時にスパークを感じたんだよね。そこからだんだんシリアスな感じになっていった。だから、僕らの音楽をより多くの人には聞いて欲しいんだけど、客観性は保っていかなきゃ、って思ってる」

●最後に一つだけ。実は、私はホールの『リヴ・スルー・ジス』にものすごい影響を受けてしまった人間なのね。

「アハ、そうなんだ（笑）」

●（笑）だから、あなたと同じく、あの90年代前半のグランジと呼ばれた音楽には、自分にとって大きな意味があるし、愛着もある。だから、あなた達のサウンドが——勿論、すべてにおいてではないけれど——ニルヴァーナから確かに何かを受け継いでいる、という事実は、すごく喜びを感じるんですね。彼らから受け継いだ何か、それはあなた自身どんなものだと思いますか？

「まず、『ネヴァーマインド』ってアルバムは聴いてて、本当に楽しくてしょうがなかったんだ。彼ら自身も、素晴らしい人達だと思ったし。うん、あらゆる面でインスパイアされまくった。『人にあれこれ指図しない音楽』っていうのかな。しかも、すごく知的で、でもインテリ臭くなくって。だから身体で感じることが出来たんだと思う。それに、すごく詩的だよね。とにかく、他のバンドとは全く違ってた。ホント、あのアルバムに出会ってからは、他の音楽は聴けないってくらいの状態だったんだ（笑）。うん、だから確かに『ハイリー・イヴォルヴド』に入ってる古めの曲には、彼らからの明らかな影響が表れてるんだと思う。ギターを手にしてジャムってみよう、って気を僕らに起こさせたのは、ニルヴァーナに他ならないよ。うん、間違いなく、ザ・ヴァインズの生みの親だと思う。それくらい、当時は大きな存在だったんだ」

取材が行われた数十分間、クレイグは努めてチアフルだった。一つひとつの言葉は柔らかで、そして（読んでもらった通り）音楽への敬愛と、2ndアルバムへの意欲に溢れていた。その日着ていた「MUSE」と書かれたTシャツについて訊ねてみると、恥ずかしそうに顔をクシャクシャにしながら「（笑）うん、ミューズはすごく好きなんだ。ホントのTシャツが欲しくて、イギリスに行った時に探したんだけど見つからなくってさ。だから、自分でロゴを書いて、作ってみたんだ」なんて言っていた。

そして撮影。スタッフから「取材で多少疲れてるだろうから、15分くらい休憩させたい」と言われ、私とカメラマンのジェレミー、通訳女史は、外の駐車場で待つこととなった。しかし、待てども待てどもクレイグどころか、スタッフもやって来ない。日も暮れかけ、ライヴの開演までに既に一時間を切っている。予定の時間から30分後、やっとスタッフに連れられて、サングラスをかけたクレイグが出てきた。すぐに撮影をスタートしたものの、どうにも様子がおかしい。ついさっきまでのチアフルさが全くない。何とか現場のムードをよくしようとするジェレミーの会話にも、忙しなく身体をグラグラと揺らしながら、面倒くさそうに応えるだけ。「サングラスを取れるかな？　一枚か二枚撮る間だけでいいんだけど」「ノー」。それほど撮影が嫌いなのだろうか？　ただ、嫌な予感とムードだけがどんどんと増してゆく。次に取材を控えていたフランスからやって来たチームは、焦り始めている。無理もない、この取材までのタイムラグで開演時間はもう間近に迫っているし、何より、まともにろれつも回らないクレイグが、インタヴューをこなすなんて誰の目から見ても不可能だからだ。「ああ、私達が先のインタヴューでよかった」という正直ホッとした気持ちと、「こんな状態になったのは、もしかして自分の取材のせいなのか？」という不安がいっぺんに沸き上がってきた。そんな表情を察してなのか、撮影が終わってからクレイグがやって来た。「日本には……うん、ホントすごーく行ってみたいんだよ。でも、レコーディングをやらなきゃいけないし……。でも、たぶん、この後もツアーをしなきゃならなくなりそうだし……うん、次のアルバムは、来年にならないと出来ないんだろうな。そうしたら……日本に行きたいんだよね」。ほとんど独り言のように、小さな声でそんな風に呟いている。その表情も、声も溶けてしまっているようで、聴き取るのが難しい。足取りももう怪しくなってきている。思わず、「ねえ、大丈夫なの？」と言ってしまった。すると、少しだけ微笑みながら、こんな風に呟いた。「うん、大丈夫。でも……体の中のエナジーはもう残ってなくて……今の僕は、カスカスの抜け殻みたいなものなんだ」。

この最後の撮影だけは、気が滅入った。まわりの関係者から、「ありゃ、明らかにマリファナなんかじゃないね」という言葉が囁かれる。「あれは、カート・コバーンも使ってたやつさ」、という意味だ——そう、私自身、そんな考えが撮影中ずっと頭の中に張り付いていた。

確かに、今のザ・ヴァインズの突出した急激なブレイクは、ある意味で業界に作られた部分がある。クレイグ・ニコラスは、あまりに早く、スター・システムへと押し上げられてしまった。そのことで、彼が少なからずダメージを受けているのは、私が目にした、たった数時間の光景だけでも明らかだ。ただ、同時に、彼が音楽／ソングライティングの感性をより研ぎ澄ませているのも、また事実だ。そう、本当に微妙な気持ちになってしまう。クレイグがインタヴューで、「僕らはもうオーストラリアに戻って、新しい曲をレコーディングするんだ」とくり返し言っていたのを思い出す。きっと、本当に今はそうすることが必要に違いない。だって、もう、誰も二人目のカート・コバーンは必要ないでしょう？

実は、この日から一ヶ月後の9月、私は再びオーストラリアまで（自腹で）ザ・ヴァインズのライヴを観に行ってきた。イギリスやアメリカの半狂乱的磁場からは離れた、彼らの母国のオーディエンスが、どんな風にザ・ヴァインズを聴いているのか知りたかったからだ。そして、クレイグがほんのちょっとでも、リラックス出来ているのを見たいと思ったのだ（というか、それを確認しなければ、自分自身が不安で仕方なかった、ということだろうな）。シドニーやメルボルンとは違う、小都市のブリスベンという土地柄もあったのだろう、ライヴに集まった400人くらいのオーディエンスは、みんなのんびりとした雰囲気だった。アメリカで見たような、「今、一番流行ってやがる音楽を聴いてやろうじゃないか」的なギラギラとしたムードは皆無。バンドのステージも、セットそのものは変わらないものの、ずっと穏やかで、安定感のあるものになっていた。前号でボロクソに書いたほど、リズム隊の二人もそう酷くはない。ステージ終了後、楽屋にちょっとだけ顔を出してみると、おでこに氷のうを当てた本人が出迎えてくれた。「最後、ステージでめっちゃめちゃに暴れてた時、自分のギターにぶつけちゃったんだ（笑）」。前号の『スヌーザー』をパラパラとめくりながら、「ねえ、リチャード・アシュクロフトのアルバム聴いた？　僕はすっごいアルバムだと思う」「リバティーンズも好き、スーパーグラスのアルバムもグレイト！」と、本当に嬉しそうに話しているのを見て、私はほんの少し安心した。このままオーストラリアでレコーディング出来ればいいのにね、と言うと、「ねぇ？　でも、また来年までツアーなんだって」と顔をしかめながら笑っていた。本心としては、私だって早く彼らが日本に来てほしくてしょうがない。どれだけの人達が、ザ・ヴァインズの音楽を楽しんでいるのか、早く彼らに見せてやりたい。ただ、同時に、それが一年後まで延びてしまっても構わない、とも思う。だって、彼らは、本当にまだスタートしたばかりのバンドだから。何も急ぐ必要はない。ゆっくりでいいから、しっかりと一歩一歩進んでくれればいい。そうすれば、きっと私達は、本当の意味で、21世紀最初の天才を目撃出来るはずなのだから。 S

READERS' FORUM

ルライト"初めて聴いてしまった（持ってるベスト盤に入ってなかったから）。ああ、こりゃストロークスだのヴァインズが束になってもかなわんわ、確かに。音楽聴いて鳥肌立つなんてめったにないけど、全身の血が逆立ったよ。そんなザ・フーのキース・ムーンの幼い頃の写真を、「ロックス」のジャケットに使ったプライマルのチケットもお願いします、是非!
（新宿区／佐藤穂積／22歳）

相変わらずの厚さに値段に、もうだいぶ慣れてきちゃいました。毎回特別定価なのが笑えます。しかし、それ以上にビビッた&笑ったのは、『マイ・ジェネレーション』のタナソウ氏のレヴュー!! こんなこと出版物に書いていいのかと一瞬ビビッたものの、2回目に読む時には笑えた。ただ、読者に殺すぞと言い放つ人が編集長の雑誌が、『スヌーザー』以外にこの世にあるのか……。
（埼玉県／近江俊裕／16歳）

ザ・フーのタナソウのレヴュー……ウザイです。そんな言われると引きますよ、正直。「殺すぞ」って……ネェ……。まあ、『マイ・ジェネレーション』買うつもりですけどね♡。（佐賀県／山崎剛／22歳）

一つだけ言いたいことがあります。『スヌーザー』月刊化されても、この御時世、自分の財布にはきつい!! 以上。

タナソウの言う通り買ったよ、『マイ・ジェネレーション』。「もうオアシスなんか、どっか行っていいよ」って思う。世界最高のロックンロール・バンド、ザ・フー万歳。（船橋市／赤田有也／15歳）

9月のクラスヌに出演してくれたモーサム・トーンベンダーの百々さんも、楽屋裏で「……『殺す』って、こんなこと言っちゃっていいんですか?」と微妙に不安そうな顔してました。ちなみに、今号ではわたくし唐沢が、チ○コだマ○コだ書いたりしていますので、死ぬほど時間が余ってる方は探してみてください。

「レディオヘッド音楽団」のツアー・レポート、すごい親密でよかったです。音楽って元々はこういう交流文化なんだなって思ったし、ファンとの掛け合いも彼らしくていいな、と思いました。しかし、こんなにまだ聴いたことない曲があるなんて……。
（下関市／前川賢輔／20歳）

そして、それをほぼ毎年、「これはヴァカンスだから」と言い張り、フランスやらスペインに観に行く編集長って……。

今号にもよく表れてる通り、最近の新人バンドのカッコよさには、何の音楽ムーヴメントも通過してこなかった世代の人間としては、ある種の感慨を抱かずにはいられない。願わくばあと2、3年早ければ……。今高校生のやさぐれ少年少女達が羨ましい。『ミュージック・マガジン』なんかでライター達がバンドのことをけなしてるのもいい感じ（今月号のザ・ミュージックの評みた? 笑えるね! ジジイババアはすっこんでろ!）。ローゼズだって旧世代には嫌われたんでしょ? う、何か興奮してきた! ということで、『スヌーザー』にはもっと輸入盤のレヴューを増やして欲しい。新しいバンドをどこよりも早くどんどん取り上げて欲しいです。「『NME』のシングル・オブ・ザ・ウィークを取った～」なんて形容詞はいりません。どんどん突っ走って下さい。やはり月刊化か?!
（船橋市／牛島俊雄／19歳）

最近、タナソウが尋常でない熱でもって推しに推しているザ・コーラル、そして、唐沢さんもゾッコンLOVEのイケメン・パワーポップ=OK GO、聴きました!! ヤバイ、更にヤバイ。バリヤバ。ザ・コーラル、一回聴いた後、「これがタナソウずっぱまりの（疑）?!」と思ったけど、しばらく経って聴いた時にビックリ☆ わたしもずっぱまった!! OK GOはすごく好みだった。ビークル好きの私には少し似てる部分があると思えましたが。ナンバガ解散に涙々の日々です。
（相模原市／橋岡亜実／20歳）

ザ・ヴァインズの記事のラストを読んでガクゼン。なんだそのゴールデン・タイムのバラエティ番組みたいな引きは—!!!（泣）。気になる気になる。次号も買うかもしれない可能性が出てきたではないか。その前にザ・ヴァインズのCD買わな。あと、OK GOとストロークス（遅）とベックとリバティーンズとコーラルと……。（倉敷市／野中美保／21歳）

この間イギリスに行ってきたんだけど、旅行中に『スヌーザー』で取り上げてるような、イキのいい新人さんのライヴがなんとか観れないかな、と思ってたら、旅行最終日（9/6）にクレッセントのライヴを観ることが出来ました! 小さい会場で、見かけはあまりカッコよくないけど（関係ないですね）最高でした。そして、もっとびっくりしたのは、ノエル・ギャラガーも来ていて、僕の前を通った時は、もう困ってしまった。あまりオーラは出してなかったようです。
（東京都／清水直／21歳）

「か、かわいすぎる……」と口走ったきり、我に返るまで数十秒。そう、ザ・ヴァインズのクレイグ君! スヌーザー史上最高の上モノ美少年じゃないですか! あの顔であのシャウトと思うと、お姉さんはもう堪りません。生で、ぜひ。35歳がこってり着こなすザ・ヴァインズTシャツも粋ですよ、きっと。それから、ぽってりとしたジュリアンも、抜け毛を気にするクリスも、私がまとめて引き受けましょう。デブ専／ハゲ専と呼ばれていた頃の血が騒ぐ。ビバ! 逆ハーレム（妄想大爆走!!）。（大阪市／金沢節美／35歳）

3号連続でロックンロール&特別定価。ロックンロール大嫌い&ド貧乏な大学生にとって鬱病になりそうな程ショックです。若手ロックンロール・アーティストをプッシュしているので、仕方なく試しにストロークスのCDを借りましたが、3回ほど全曲くり返して聴いてみても、全然ダメ。逆に頭が痛くなってきました。最近ロックンロール・ムーヴメント再来、みたいな感じですが、私にとっては「暗黒時代突入」ってな感じです。この頃やけに『世界遺産』を毎週欠かさず観ています（BGMでエイフェックス・ツインが流れたりしています）。シガー・ロスの新作はもう少しだ!! 唐沢&タナソウの時代は6ヵ月でおしまいだ!! 次号の空しいクリスマス特集&特別定価580円（心と体に"寂しい"）34号を新編集長ダイジローさんにお願いします。別名、ダメジロー（駄目次郎）号。発禁本になりそうですね。（山口市／藤川拓郎／19歳）

人間失格ストーカー=ダイ☆ジローへの励まし／失笑の手紙も、今月は多数頂きました。皆さんの仏のようなお心遣いに感謝しつつ、その中から幾つかご紹介。

フェス記事目当てで買ったんですが、スタッフの失踪で大変だったんですね。ダイジロー君、最低ですね。男らしくないよ。加藤君の失踪の理由は? おデブでしんどかったから? ま、わかるけどね、一体どんな巨漢なんだよ。でも、他の雑誌のフェス記事も読んだけど、『スヌーザー』の一番おもしろかったよ、本当（あれ? 失踪事件がおもしろかったのか?）。唐沢姉さんが、手綱を握ってたら安心だね（モッシュ・ピット気をつけて!）。もう傷も癒えてきた頃やもしれませんが、ダイジロー君と加藤君へ。私も大変な弱虫なので、人のことをエラそうにはまったく言えた義理ではないのですが、自分の心が弱っていたり、寂しい時には（やさしくしてほしい時）、誰かにやさしくしてあげる事です。身の回りの人にね。唐沢さんにはやさしく! やさしく!! 女性なのだから! 猫ちゃんやワンちゃんにもやさしく! やさしく!! 私の家では猫を溺愛しています。
（香川県／金丸美也子／29歳）

わかるよ、ダイジロー。僕も彼女にフラれたよ、つらいよ。でも、ストーカーはよくないよ。お互い消耗するだけだよ。がんばろうよ、お互い。いい曲があるよ。シガー・ロスのニュー・アルバムの"VAKA"って曲。大丈夫だよ、僕達一人でもやってけるよ。
（一宮市／斉藤英朗／21歳）

皆さんの言葉が彼の心に届いてくれればいいのですが、相変わらずネットでエロ・ページ（ハードコア方面か「ただでヤレる!」系）をサーフィンする日々です。と、年の最後にこんな話で終わるのもつらいので、最後の一通。

スペースシャワーTVのフジロック総集編番組を見てたら、どこかで見たことがあるメガネにひげ面のオヤジが上機嫌にインタヴューを受けていました。酔っ払いひげオヤジは、「フジロック最高! ペリー・ファレル、ペリー・ファレル」と完全フジロック馬鹿な発言をしていました。こんな大人になりたいなぁ、とおバカな私は思いました。
（千葉県／中野里美／21歳）

ホント、馬鹿ばっかりですいません。

この『READERS' FORUM』は皆さんのお便りで成り立ちます。本誌への感想やここに掲載されたハガキへの意見／反論、その他提言、小ネタ、なんでもOKです。たくさんのハガキをお寄せ下さい。なお、掲載された方の中から抽選で、P.280のプレゼントを発送させて頂きます。今月はチケット・プレゼント第二段!! 頑張ってチケット、ゲットだぜ!

NEWS

力が必要だった」と語ったのは、ビョークの母親。BBCによると、56歳の彼女は、米大企業がアイスランドに20億ドルかけて建設しようとしている発電所に反対し、3週間以上にわたるハンガー・ストライキを行った。アルミニウム業の最大手アルコアは、アイスランド政府の許可を取り、バトナ氷河の近くにアルミニウム製錬所と水力発電所の建設を計画。ビョークの"ヨーガ"のビデオにも登場したこの氷河は、多くの貴重な動植物の生息地だという。「世界から注目を集められたけれど、まだまだ続けていかなきゃ」とは、3週間ナチュラル・ティーとハーブだけしか口にせず、6キロも体重が減ったビョーク母の談話。意志の強さは家系のようです。興味のある方は反対キャンペーンのサイト〈www.raddir.is〉へ。

クリス・マーティン、イアン・マッカロクのソロ作に参加

ブリトニーからビートルズまでカヴァーしまくって、ファンを驚かせている全米ツアー中のコールドプレイ。メンバーのクリス・マーティンとジョニー・バックランドは、最近仲良くしてもらっているイアン・マッカロク（エコー&ザ・バニーメン）のソロ新作に参加したらしい。彼らの大ヒット中の『静寂の世界』の制作時に、マッカロクが大きな支えとなったことは、これまで何度も語ってきたクリス。彼のソロ新作では、2曲でヴォーカル参加している。

また、『ローリング・ストーン』誌では、"僕のトップ10アルバム"に、バニーメンの『オーシャン・レイン』だけでなく、現在のツアーでサポートを務めるアッシュの『1977』や、オアシスの『ディフィニトリー・メイビー』をクリスは挙げていた。かなり義理堅いキャラのようです。

リバティーンズの大暴れツアーはなんとか終了

10月初め、22会場を廻るリバティーンズの長いUKツアーが、ツアー・マネージャーの解雇とともに終わった。バンドが彼をクビにした理由は、「厳しすぎる」。というのも、別のサウンド・マンも「やってられない」と途中でバックレたこのツアー、噂によると、まさにセックス&ドラッグ&アルコール&ケンカ三昧の超ワイルドなものだったとか。何せ、40万ポンドの著作権料を受け取ったカールとピートは、一晩で1万ポンドを使い切ってしまったりもしたらしい。大丈夫なんでしょうか? 関係者によると、件のツアー・マネージャーはとてもいい人なんだとか。「でもかなり厳しく管理したんで、そこがカールとピートとは合わなくてさ。22年やってきて、これほどひどいツアーは初めてだ、って言ってたよ。ザ・ストロークスなんてこれに比べればお子様だ、ってね」。

フィッシュ、突如新作をリリース!

2年前、ツアーによる疲弊からいったん休止宣言をしたフィッシュ。4人のメンバーが再び集まるのには2年が必要だったが、新作アルバムの制作にはなんと4日しかかからなかったらしい。スタジオ・レコーディングとしては9作目になる『Round Room』は、12月10日リリース。大晦日にはNYのマジソン・スクエア・ガーデンで、再結成ライヴも予定されている。デッド・ヘッドならぬフィッシュ・ヘッドの一大集会となりそうだ。また、新作を彼らのサイトを通じて予約すると、ポスターや来年1月のライヴのチケットが当たるというファンにはうれしい特典もあり。2月には大々的な全米ツアーも再開され、来年は"フィッシュ巻き返し"の年になりそうだ。

マーク・チャップマン、仮釈放ならず

80年12月8日にジョン・レノンを射殺した、マーク・チャップマンの二度目の仮釈放願が却下された。2年前に最初の仮釈放が審議された際も、ヨーコ・オノがステートメントを発表するなどして却下された彼は、現在ニューヨークの刑務所で終身刑を服役中。2年後に再度審議はされるが、殺されたのがジョン・レノンであることによって、チャップマンが仮釈放される見込みはまったくないと見られている。

ザ・ヴァインズ、フィル・スペクターをスカウト

セカンド・アルバムのプロデューサーに、ザ・ヴァインズが"ウォール・オブ・サウンド"の伝説、フィル・スペクターをリクルート中らしい。現在スペクターはスターセイラーの新作を手掛けていて、「どちらのグループにも非常に期待している」とのこと。はてさて、実現するんでしょうか。

ところでそのフィル・スペクターだが、「業界でもっとも長い著作権料バトル」と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネッツと続けていた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネッツに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに"ビー・マイ・ベイビー"など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネッツ側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリーツ、「デーモン・アルバーンって誰?」

先号で、自分達について曲まで書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないんだよねー」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリーツ。9月12日、ザ・ストリーツことマーク・スキナーがロンドンで開いたライヴに、デーモン・アルバーンがチェックしに来ていたのだ。マークが『ローリング・ストーン』誌に語った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだよ。で、『有名人サークルにようこそ』とか言われて、『うるせえ、へらへらしやがって』って言っちゃってさ。悪い人じゃないみたいだけど、俺とは違う種類の人間なんだ。俺はただ、そのまま列車に乗って恋人に会って、音楽を作りに戻っただけ」。なんか、グレアムのブラー脱退騒動も含めて、ここ最近のデーモン・アルバーン、格好悪いですねぇ。ま、とにかくイギリス・シーンの世代交替は進んでいる模様です。

R.E.M.、新作リリース間近

バンドの公式サイトで、マネージャーのバーティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンズで数週間やって、冬にはあったかいところへ行って、春にはまた別のところで、って感じで。来年の夏にはライヴも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ベリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタイプが同じステージに立った。地元ジョージア州アセンズの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した"ミルズ／トンクス"。マイク・ミルズがヴォーカル兼リズムギター、ビル・ベリーがドラム、他に地元のミュージシャン二人が加わったバンドだった。次々に名曲をカヴァーするなか、最後にステージに現れ、ザ・タートルズの60年代ポップ"ハッピー・トゥゲザー"を歌ったマイケル・スタイプ!! ピーター・バックが欠けていたとはいえ、大勢の観客にとっては感激の一夜となった。

コーナーショップが解散?

レコード会社に契約を解消され、タブロイド紙に「ティジンダーは音楽をやめようとしている」と書かれたコーナーショップが、「解散はしてない」と『NME』誌に明言した。ティジンダーとベンが出したステートメントは以下の通り。「ティジンダーは確実に、音楽業界でやっていくのを決意している——たとえ流れが"チャンス到来"から"必死でチャンスを捕まえろ"に変わったとしても、ね」。

現在、ティジンダーはザ・ナザライツ&ザ・ギグ（元オアシスのポール・マクギガン）というレゲエ・グループなど、さまざまなプロジェクトに参加中。逆境に負けずがんばってほしいものです。

カート・コバーン日記、出版される

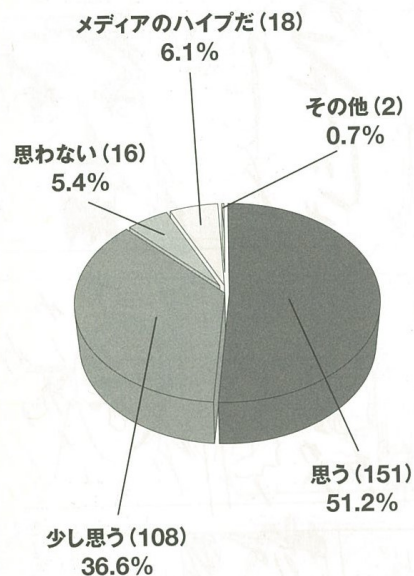
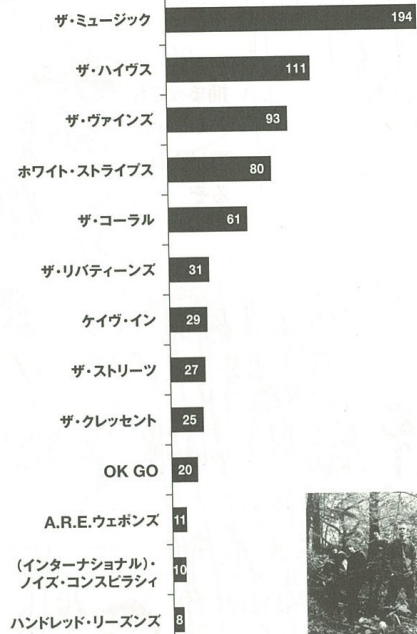
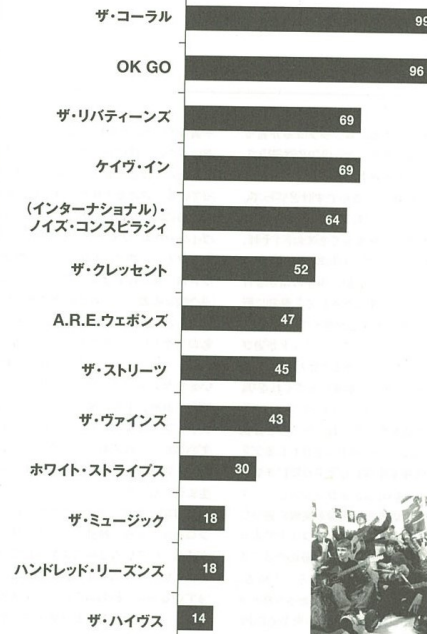
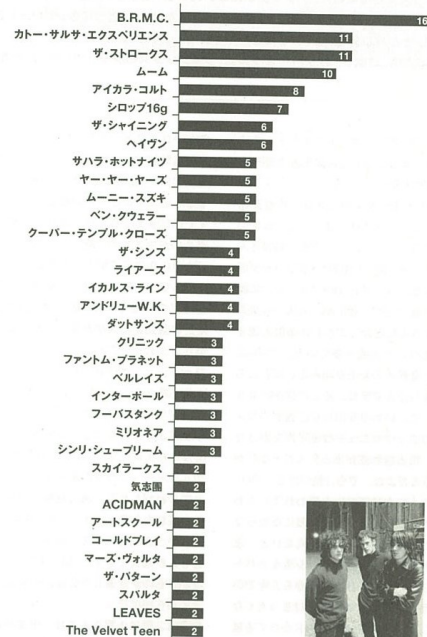
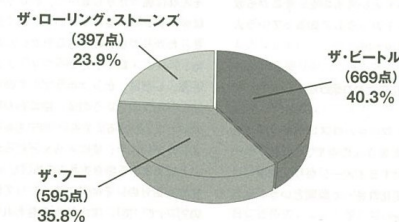
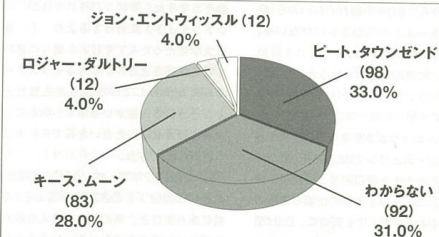
今号の「激動の1991年」の特集内でも記事となっている、カート・コバーンの日記『Journals』が、11月4日発売された。記事の中では詳しくは触れなかったが、これはカートのノートの中から270ページに及ぶ彼自身の言葉や絵を、そのまま複製したものとなる。その一部を加えて紹介してみよう。

92年、ドラッグ更生施設にしばらく入った後に書かれた手紙では、カートがずっと悩んでいた原因不明の胃痛についてこう書かれている。

「プロテインも飲んだし、ベジタリアンにもなったし、運動もした。煙草もやめたし、何人も医者にかかった。で、俺はこう決めたんだ。3週間だけ痛みを和らげるために、ちょっとヘロインをやろうって。しばらくはバンドエイドになったけど、また痛みが戻ってきて、俺はヤクをやめた。くだらないし、もう二度とやらないよ。ヘロインを薬として使えると思ってる人には気の毒だが、そうじゃないね」。

また、有名人としてのステイタスに悩むくだりには、ザ・フーの"マイ・ジェネレーション"を引用し、「俺はピート・タウンゼンドになる前に死にたい」とも書かれている。

こちら「スヌーザーズ・サーベイ」は、「本誌読者が日々、何を考え、何に感動し、どんな匂いの屁をこいているか」を、
厳密なアンケートにより統計。その結果、みなさんがどれだけ立派なダメ人間であるかを立証しようという、挑戦的な内容。
第9回目の今回は、「俺的・最重要新人」、および「英国3大バンド&ザ・フー人気投票」のアンケート結果発表から。
そして今回のお題は、本誌今号の特集に連動、「激動の91年」世代調査、そして「2003年、変化の予感」です

①ここ1、2年でイキのいい新人ロック・バンドが盛り上がってきてると思いますか？

②前号で紹介した新人バンド13組のうち、あなたの好きなバンドは？

③13組の新人アーティストのうち、あまりよく知らないが気になってるバンドは？

④前号に紹介されていなかったバンドで、あなたが好きな新人バンドは？

⑤60年代英国三大バンドを、あなたの好きな順番で並べるとしたら？

⑥ザ・フーのフェイヴァリット・メンバーは誰ですか？

ダイ「えー、今回のスヌーザーズ・サーベイのお題は、前号の特集記事で紹介した全13組から選ぶ、『俺的新人バンド』と、『英国3大バンド&ザ・フー人気投票』でした。で、今回の結果がこれ」
唐沢「やっぱり、みんな、ここ1、2年、盛り上がってるんだねー」
ダイ「で、ザ・ミュージック強し!」
唐沢「別にアンタが強いわけじゃないよ」
加藤「でも、『気になってるバンド』のところを見るとさ、コーラルが未知なる怪物って感じで、かなりインパクトがあったみたいだね。ま、僕の記事もかなりよかったしね。で、OK GOが第二位」
唐沢「さすが、アタシ!」
ダイ「それじゃ、自分が紹介したアーティストの星取り表じゃないですか!!」
唐沢「だって、編集長がきばって、4Pもさいたのに、ケイヴ・インの人気が低いのは、記事書いたアンタのせいでしょ」
ダイ「ぶー……」
松田「続いて、60年代英国3大バンド、『一番好き』から順に、3点、2点、1点で集計してみた結果です。どうです?」
唐沢「ほら、最近、世間のいろんな音楽雑誌さんが、ストーンズを表紙にしてたじゃない?　それなのに、ストーンズ、全然負け負けじゃん!」
加藤「まあ、投票してんのが、こんな雑誌の読者だからね」
ダイ「ここんとこのロックンロール・リヴァイヴァルの親玉ってイメージもあるんだろうけど、それでも、ザ・フーがビートルズとこんなにも接戦っていうのは、ここ日本じゃ歴史的快挙だよね」
唐沢「編集長の闇は伝染するっていうかね。でもさ、正直、最後の質問の結果は、ちょっと残念だなー」
加藤「確かに。っていうか、『わからない』に大差で負けた、ジョン・エントウィッスルの立場は……」
松田「黙とうしましょう、黙とう」
ダイ「っていうか、ヴォーカルなのに、ロジャーの存在感って……」
唐沢「そういうバンドだしね（笑）」
ダイ「というわけで、次回のサーベイは『あなたの激動の91年と2003年』を探ります。P.210からの大特集と連動してますので、ご参照を」
松田「で、P.208後ろにあるハガキに、みっちりお書きください!」
ダイ「で、『2003年は何かが起きる!』っていう、編集長の直感は?」
唐沢「妄想でしょ」
松田「いや、でも、確かに、12年って言えば、歴史的な巡りあわせがあるように見受けられますね」
ダイ「あ、松田くんと俺、羊年じゃん?やっぱ、羊年が凄いってことですよ!」
唐沢「全然関係ないでしょ（笑）」 S